

國學院大學學術情報リポジトリ

2016年度のトピック7 出張報告

「東京・渋谷から日本の文化・こころを国際発信するミュージアム連携事業」アメリカ調査について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平藤, 喜久子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001911

出張報告

「東京・渋谷から日本の文化・こころを国際発信するミュージアム連携事業」 アメリカ調査について

平成28年文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」に採択された「東京・渋谷から日本の文化・こころを国際発信するミュージアム連携事業」では、「日本文化発信のグローバル連携（グローバル化事業）」として、アメリカのワシントンD.C.とニューヨークの博物館、美術館および文化・宗教施設における展示、解説、多言語化、海外における日本文化の展示の状況について調査することとした。その調査の結果は、博物館の研究、情報支援、運営、学術交流に反映される予定である。調査参加者は、井上順孝、平藤喜久子、網谷哲成・國學院大學博物館学芸員である。

調査の概要は次のとおりである。

○2月5日(日) アメリカ歴史博物館、国立自然史博物館、ニュージウムを調査。

アメリカ歴史博物館では、第二次世界大戦時に敵国であった日本についての展示がみられ興味深かった。国立自然史博物館は、展示方法やマルチメディアの活用について、先進的なものがいくつもあり、参考になった。

ニュージウムはニュースの歴史、「情報」を展示するという意味できわめて重要な示唆



をもたらした。博物館を通したメディアリテラシー教育にも参考になるものと思われる。

○2月6日(月) スミソニアン協会、サッカーギャラリー、国立ホロコースト記念館、アーリントン墓地を調査。

スミソニアン協会では、スミソニアン博物館の歴史や全体的な情報を入手した。サッカーギャラリーは、イスラームに関する特集展示を行っていた。



スミソニアンにおけるイスラームの特集展示ははじめてとのことで、歴史的に意義のある展示をみる事ができた。小学生から高校生たちの見学が行われており、展示を説明する様子や、ワーク・コーナーの状況なども調査することができた。また、端末を使つての情報公開もおこなっていた。

ホロコースト記念館は、ホロコーストにいたるまでのプロセスを丁寧に展示しており、歴史の展示方法としては優れたものであると感じる。ショッキングな映像、写真などもあり、その場合の工夫なども参考になった。国立の墓地であるアーリントン墓地では、さまざまな宗教への配慮がどのようになされているか、他宗教の共存の様子を実見することができた。



○2月7日(火) ナショナルギャラリー調査。
ナショナルギャラリーでは、ボッティチェリやラファエロ、エル・グレコなどの宗教美術が大変豊富に展示されており、宗教文化教育の教材に資する調査ができた。

○2月8日(水) メトロポリタン博物館分館、クロイスター美術館、メトロポリタン美術館調査。

クロイスター美術館は、ヨーロッパ中世の修道院の回廊（クロイスター）、キリスト教美術を収集し、展示したミュージアムで、いわば創造された空間における伝統の再構築といえる。中世キリスト教美術に関する資料は、授業などで使用できるものも多かった。

メトロポリタン美術館では、日本関連の展示、宗教文化関連の展示を調査した。浮世絵の展示では、タブレットが効果的に使用されており、日本語が理解できない人向けの展示方法として、大変参考になった。

いずれの博物館でも、Wi-Fiが提供されており、アプリをインストールして地図などを参照することができるようになっていた。



○2月9日(木) アメリカ自然史博物館、MoMA美術館調査。

当日は大雪で、吹雪のため、開館している交通の便のいいミュージアムの調査とした。自然史博物館は、人類学の博物館という視点があり、日本についても人類学的視点からの展示がなされていた。内容については、神道もあったが、きわめて乏しいものであり、連携も可能ではないかと思われた。



(自然史博物館・日本展示)

MoMA美術館も、Wi-Fiが提供されており、アプリをインストールすると、展示品番号で解説を聞くことができるという工夫がなされていた。

○2月10日(金)

午前 9.11メモリアルミュージアム調査。
2014年に開館した、国立のミュージアムとしてはとても新しいものである。

メディア環境も充実しており、アプリをインストールすると、多言語でさまざまな情報を入手することができた。

写真撮影は、可能な部分とそうでないところがあったが、情報量としてはかなりのものがあり、充実した内容の博物館であった。



(グラウンド・ゼロ)

(平藤喜久子)